

創立百三十七周年記念式典 校長式辞

朝夕はめっきり肌寒くなり、日増しに秋の深まりを感じるようになりました。本日は、高橋同窓会長様、永井PTA会長様はじめ、多数のご来賓のご臨席を賜り、山形県立山形東高等学校創立百三十七周年記念式典を挙げていただけますことは、この上ない喜びであります。

さて、県内随一の伝統を誇る本校は、その長い歴史の中で数多の有為な人材を輩出してまいりました。この創立記念日という機会に、先輩方の残した偉業と生きざまを振り返ることは、私たち後輩が今後の人生を考える上で大いに参考となるものと思います。そこで、本日は未だ黎明期にある本校で学び、後に国家や国際社会に多大な影響を及ぼした三名の偉大な先輩のお話をしたいと思います。

本校は明治十七年十月二十九日に、山形県師範学校に併設する形で本県初の県立中学校として創設されました。師範学校とは、当時急ピッチで進められていた小学校の設置に伴い、必要となる教員の養成機関として県が設置したものであり、現在の山形大学地域教育文化学部がその流れを引き継いでいます。明治十五年には中学校教員を養成する目的で、山形県師範学校内に中学師範学予備科が設立され、その第一回入学生の中に、後に常設国際司法裁判所所長を務め「世界の良心」と称された安達峰一郎氏がいました。この予備科は事情により設立から僅か二年で廃止され、我が山形県中学校が設置されたわけですが、その機に峰一郎少年は十五歳にして法律家を志して上京し、超難関の司法省法学校に入学します。そのため同窓会では本校にゆかりのある「校友」と位置付けています。その後峰一郎氏は帝国大学法律科へと進学し、国際法とフランス語を習得します。

卒業後外務省に採用され、イタリア公使館やフランス大使館に外交官として勤務する間に、幕末以来の欧米諸国との不平等条約の改正や、日露戦争終結のためのポーツマス日露講和条約の締結などに尽力し、その学識が認められて法学博士の学位を授与されます。また、ベルギー・フランス大使時代には、第一次世界大戦後の国際平和の推進のために国際連盟を中心に活躍し、常設国際司法裁判所の創設に深く関わるとともに、第二回裁判官選挙においては圧倒的得票で当選し、同裁判所長官を務めることとなります。しかし、日本が満州事変後、国際連盟を脱退するなどの重圧もあってか、病に倒れ昭和九年オランダのアムステルダムで六十五歳の生涯を閉じます。その博士をオランダ政府が国葬で弔ったことから、国際的に尊敬を集めていたことが窺い知れます。

山形大学都市・地域学研究所と山辺町では、「安達峰一郎記念世界平和弁論大会」を毎年開催していますが、現三年生の垂石ひなたさんが中学校時代に、寒河江茜里さんが昨年最優秀賞を受賞するなど、偉大な先輩の理念が本校生によって今も引き継がれていることを大変嬉しく思います。

さて、山形中学が未だ師範学校に併設され、古く狭隘な校舎で過ごしていた明治二十四年、後に大蔵大臣、日銀総裁となる結城豊太郎氏が入学してきました。ご本人の回顧録には、当時の中原貞七校長から英語の経済書の教授を受けたことが、後に銀行を志すきっかけとなったことや、後に東京商科大学（現一橋大学）学長となる三浦新七氏ら級友との数々の武勇伝など、山形中学の五年間における恩師や友人との出会いが、人間形成に大きな影響を与えたと記されています。山形中学卒業後、仙台にある第二高等学校（現東北大学）そして東京帝国大学へと進学し、日本銀行に入行します。東京・名古屋・大阪各支店

長を歴任したのち、安田財閥を経て、日本興業銀行総裁に迎えられ、昭和初期の不況対策に腕を振るいます。そして昭和十二年、林銑十郎内閣の大蔵大臣兼拓務大臣に就任します。本校卒業生初の大蔵大臣誕生です。

大臣はその年母校を訪れ、千人を越す生徒、教職員、来賓の前で講演を行いました。話の途中で「お土産にこれを持ってきました。」と言って、校長に一本の白地の旗を渡したそうです。その一面には自筆で「奉公」、もう一面には英語でクラーク博士の **Boys be Ambitious** と墨書されています。ステージ上、向かって左手に飾られている旗が実物です。この「奉公旗」は経年劣化が激しかったため、今から五年前に同窓会が東北芸術工科大学に依頼し、修復していただいたものです。大臣は現代を生きる私たちにも、「折角豊かな才能を持って生まれてきたのだから志を高く持って自己実現に励め。それが即ち国家社会の発展に寄与することとなるのだ。」と語りかけてくれているような気がします。また、正面玄関から二階職員室に上がる階段の踊り場には、大臣の揮毫による「独座大雄峰」という書が飾られています。大臣がこの句に寄せた心情は明らかではありませんが、時の政情に関する心境とも、羽前の三山の勇姿を歌う校歌に結びつけたものとも推測されています。

大臣は、林内閣の崩壊後、日本銀行総裁となり六年半に亘り戦時金融の最高責任者として活躍しました。そして、昭和十九年、これから述べる小磯国昭首相の内閣顧問の一人として、太平洋戦争末期の深刻な状況について相談し合ったとのこと。

小磯国昭氏は結城豊太郎氏の二年後輩で、山形中学が千歳園と呼ばれていた現在の地に移転し、念願の独立校舎を持つ明治二十六年に入学しました。卒業後は陸軍士官学校、陸軍大学校を経て、陸軍少佐となり、昭和十二年には陸軍大佐に昇任します。また、平沼内閣、米内内閣では拓務大臣を務め、太平洋戦争開戦後の昭和十七年に朝鮮総督を命じられ、朝鮮に赴任します。そして敗戦の色が濃くなった昭和十九年七月に東條内閣の後を受けて第四十一代内閣総理大臣に就任します。小磯首相は戦局の転換を図るべく必死の努力をしましたが、大戦末期の日本にほとんど戦力はなく、陸軍の反対などもあり、如何ともし難い状況でした。その後の中国との和平交渉にも失敗し、日本敗戦の四ヶ月前、九ヶ月という短い期間で辞職することとなります。終戦後は、連合国から戦争犯罪人として東京巢鴨拘置所に収容され、昭和二十五年に病気のため拘置所内で七十年の生涯を閉じます。

無数の犠牲者を出した大戦自体は肯定されるべきものではなく、私たちは戦争の惨禍が二度と起きないように知恵を出し合っていかなければなりません。しかし、当時の社会情勢の中で、中学生の小磯少年が、純真な心で国の発展のため士官学校を志願したのはごく自然なことだったのではないのでしょうか。彼がいかに尊敬に値する人物であったかを物語るエピソードが残っています。昭和十三年、本校の同窓会が創立されることとなり、その発会式が小磯国昭陸軍大将の来形に合わせて行われることになりました。陸軍大将といえば雲の上のような存在であり、当然のことながら特等席を用意していたのですが、そこへご案内したところ、「今日は同窓会だろう。同窓会なら俺も一卒業生だ。みんなと一緒だ。」と言って、皆と同じ固いベンチに腰を落とされたそうです。翌昭和十四年、拓務大臣として再び母校を訪問し、記念講演がもたれました。その際に書かれた「清修自守」の扁額がこの山東講堂のロビーに掲げられています。「心を清く潔白にして己を見失わないようにする。」という意味だそうです。

これら三名の大先輩に共通することは、十代半ばの若さですでに高い志を立てていたと

ということです。そして、国を思い、友を思い、故郷を思う気持ちを常に忘れることはありませんでした。私たちもこのような先輩諸氏の思いを引き継ぎ、自己実現と社会の発展に向けて有意義な人生を歩みたいものです。

令和三年十月二十九日
山形県立山形東高等学校
校長 須 貝 英 彦